

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00438

研究課題名(和文) フランスにおける聖顔の信心の生成と展開

研究課題名(英文) Formation and Development of Devotion to the Holy Face in France

研究代表者

大須賀 沙織 (Osuga, Saori)

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：50706653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：論文「トリノの聖骸布とヴェロニカの聖顔布についての覚書 福音書から受難劇まで」(2022)により、聖顔布をめぐる伝承の生成過程を明らかにした。福音書、聖書外典、受難詩、受難劇を考察対象とした。

論文「ナントの聖ヴェロニカ兄弟会とトゥールの聖顔の大信心会 受難のキリストを見つめる霊性の地域的展開」(2023)により、聖顔に根差す中世の兄弟会と近現代の信心会の実態を調査比較し、信心の手引書と出版物の概要を示した。

論文「ジョルジュ・ルオーにおける聖顔とヴェロニカ覚書 信仰と文学をめぐる」(2024)により、《聖顔》の連作の概要と変遷を調査し、ルオーの信仰とその周辺の文学者たちの影響を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、傷ついたキリストの顔を見つめ、受難の神秘に浸透しようとする霊性が、フランスでどのように生成され、展開してきたか、歴史的、文学的、図像学的側面から調査分析がなされた。聖骸布と聖顔布をめぐる伝説が、福音書から受難劇まで、さまざまなヴァリエーションを生みながら継承された流れが示された。中世の「聖ヴェロニカ兄弟会」と、近現代の「聖顔の大信心会」という、ローカルでマイナーな、しかしナントとトゥールでは重要な歴史の一面が示された。手引書の概要と出版物目録により信心史の具体的側面が示された。《聖顔》を描きつづけた画家ジョルジュ・ルオーの信仰と作品への反映、特殊な文学的環境が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：Article (2022): "Note on the Shroud of Christ and the veil of Veronica: from the Gospels to the Passion Plays". An exploration of the Gospels, Apocrypha, Passion Plays and legends around the Shroud and the Veil of Veronica. Including an analysis of genetic processes.

Article (2023): "The Confraternity of the Sacred Veronica of Nantes and the Archconfraternity of the Holy Face of Tours: Contemplation of the Face of the Outraged Jesus". A comparative study of the history of the two Confraternities, one, medieval, the other, modern, with both dedicated to the Holy Face of Jesus in the Passion. Containing summaries of Manuals of this devotion.

Article (2024): "The Holy Face and Veronica in Georges Rouault: notes on his faith and literary environment". A study of a series of Rouault's paintings dedicated to the Holy Face between 1904 and 1954, especially to the "Miserere" and "Passion". Including introductory meditations on the Holy Face by Rouault's friends Huysmans, Bloy, Soares and Raissa.

研究分野：フランス文学

キーワード：聖顔 ヴェロニカ 受難 十字架の道行き 聖骸布 信心会 兄弟会 ジョルジュ・ルオー

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、それ以前に行った二つの研究テーマから生じたものである。一つは、バルザックの時代に起きた「聖母出現」について論考をまとめる中で、マリアやキリストの「出現」や「メッセージ」を受けた女性たちについて思いめぐらせたことによる。「聖顔」(Sainte Face)の信心の展開においても、19世紀にトゥールのカルメル会修道女聖ピエールのマリーがキリストから受けたメッセージが引き金となって、聖顔の信心会が設立されていた。もう一つは、カルメル会修道女リジューのテレーズと、カトリック詩人ポール・クロードルのつながりを探る中で、やはり受難のキリストの傷ついた顔(聖顔)への特別なまなざしが両者にあったことに気づき、彼らに加え、ジョルジュ・ルオーも受難のキリストの顔を描きつづけ、このテーマには欠かせない「聖顔」の画家であることを知ったためである。こうしたことから、本研究がはじまる前年の2020年度に、(1)トゥールのカルメル会修道女の伝記と、リジューのテレーズが記した聖顔の神秘に関するテキスト読解、(2)クロードルの日記、詩、エッセイ、演劇作品におけるトゥールの聖顔とトリノの聖骸布言及箇所収集と読解、(3)ルオーが晩年まで取り組みつづけた「聖顔」作品(油絵、版画)について、大枠を把握する作業を行った。こうした作業の過程で、新たに調査すべき複数の課題が浮かび上がってきた。ヴェロニカ伝説と受難劇、十字架の道行きの歴史の変遷、ブルターニュ地方とトゥールにおける聖顔の信心の生成、トリノの聖骸布のフランスにおける受容の問題などである。また本テーマは、ナント、トゥール、リジューといった、特定地域に根差した信心でもあり、聖顔の信心の主要な拠点となった、トゥールの聖顔の礼拝堂、リジューの女子カルメル会修道院など現地調査が必要となり、事前調査を進めた。

2. 研究の目的

本研究は、受難のキリストの「聖顔」に対する信心がフランスにおいてどのように形成されてきたか、聖顔の神秘がどのように理解され、表現されてきたかを探るものである。本研究の中心課題は、1840年代にトゥールのカルメル会修道女聖ピエールのマリーが受けとった霊的メッセージと、それを受けて創設された聖顔の信心会、大信心会の実態を明らかにすることにある。大革命後のトゥールの出来事を軸としながら、聖顔の信心の歴史の流れを明らかにすることが本研究の目的である。

(1) 聖顔の信心の起源には、受難劇や信心業「十字架の道行き」に描かれたヴェロニカ伝説があり、伝承の生成過程と時代的変遷を探る。

(2) 15世紀、聖ヴェロニカ兄弟会がブルターニュ公国の都市ナントに創設され、18世紀まで継承されたあと、19世紀には新たにトゥールで聖顔の信心会が創設される。ナントの兄弟会とトゥールの信心会の実態、両地域にまたがる信心の歴史を調査する。

(3) 19世紀、トゥールのカルメル会修道女聖ピエールのマリーに啓示された聖顔のメッセージと、トゥールのマリーの霊性を受け継いだカルメル会修道女リジューのテレーズ(修道名:幼子イエスと聖顔のテレーズ)における信心の深化と展開を考察する。

(4) 1898年にトリノの聖骸布の写真が公開され、フランスでも反響を呼び起こしていく。詩人ポール・クロードルと画家ジョルジュ・ルオーは、とりわけ強く反応し、黙想を深めていったが、それぞれどのようにキリストの顔を受けとめ表現したか。

以上の課題を、文献調査と現地調査によって明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、時代的、地域的、テーマ的に4課題に分けられる。(1)中世から19世紀、ヴェロニカの伝承と受難劇、十字架の道行きに関する歴史的調査とテキスト読解、(2)15~18世紀、ブルターニュ地方における聖ヴェロニカ兄弟会の創設と継承に関する調査、(3)19世紀、トゥールのカルメル会修道女に啓示された聖顔のメッセージと、リジューのテレーズにおける受容と展開の考察、(4)トリノの聖骸布の写真公開と、20世紀フランス、とくにクロードル、ルオーにおける影響の考察である。

【1年目】2021年度は新型コロナの影響がまだ懸念されることと、応募者の校務の都合により渡航が困難であるため、主に文献調査となる(1)と(4)を中心に作業を進める。

(1) ヴェロニカ伝承と十字架の道行きの時代的変遷

ヴェロニカのエピソードは、福音書に記述がなく、民間伝承によって伝えられてきたものである。起源は不確かながら、中世には知れ渡っていたヴェロニカ伝説の生成過程の一端は、文献からたどることができる。フランスで14留(stations)の十字架の道行き(ヴェロニカがキリストの顔を拭う場面は第6留)が普及するのは19世紀のこととされ、時代ごと、地域ごとの祈祷書や信心書を調査し、その変遷を考察する。十字架の道行きに関しては、アメデ神父『キリストの受難 十字架の道行き—心的巡礼による信仰の展開』(関根浩子訳、2016)で全体像を把握し、『靈性事典』(*Dictionnaire de Spiritualité*, 1937-1995, 17 vol.)の詳細な解説を出発点に調査を進める。18~19世紀の『十字架の道行き』は電子版を数点入手済みであり、これらを読み進めつつ、より古いテキストを調査する。ヴェロニカ伝説は受難劇の一挿話として生まれたという説(Ian Wilson, *The Shroud of Turin*, 1978)もあり、関連する受難劇の調査も行う。

(4) トリノの聖骸布の写真公開と 20 世紀フランスにおける波及

1898 年にトリノの聖骸布の写真が公開されたあと、ドイツの修道女アンナ＝カタリナ・エンメリックの『主イエス・キリストの痛ましきご受難』が出版され(ドイツ語版 1833、仏訳版 1835)、イメージとテキストが重なり合い、クローデルやルオーに影響を与えた。クローデルは戯曲『都市』第 2 稿 (1897-1898)、宗教詩『十字架の道行き』(1911)、『十字架の道行き その 2』(1952) ではヴェロニカの聖顔を、公開書簡「主よ、あなたの顔は」(1935) とエッセー「キリストの顔」(1938) ではトリノの聖骸布を取りあげている。ルオーは銅版画集『ミセレーレ』(1912-1927)、アンドレ・シュアレスとの共同制作である版画付き詩集『受難』(1927-1939)、『受難』の版画をもとにした油絵など、聖顔の絵を数多く残した。20 世紀の文学者クローデルと画家ルオーにおける聖顔の表象を読み解く。

【2 年目】(3) トゥールの聖ピエールのマリーとリジューのテレーズにおける聖顔の信心の研究を重点的に行い、トゥールとリジューのカルメル会を中心に現地調査を行う。

■トゥール

19 世紀前半、レンヌ出身のカルメル会修道女聖ピエールのマリーがトゥールで聖顔のメッセージを受け、信心会が設立されるまでの流れを明らかにする。基礎資料となるのは、当時のトゥールの主任司祭が書いたマリーの伝記、聖顔の信心の推進者デュボン氏の伝記と『聖顔の大信心会の手引き』で、電子版を入手済みである。大信心会以前の『信心会の手引き』はフランス国立図書館で閲覧する。トゥールでは、女子カルメル会修道院跡、聖顔の礼拝堂、トゥール市内 7 つの教会で聖顔に関する調査を行う。

■リジュー

トゥールの聖顔の影響を受けたリジューのテレーズについては、主要な資料がウェブ上で公開されているが (Archives du Carmel de Lisieux)、公開されていない聖顔の版画のほか、テレーズの家、聖ピエール大聖堂、聖テレーズ大聖堂に置かれた聖顔の聖画、彫刻を確認する。リジューはカルメル会修道院長や信徒の働きかけで聖顔の信心が浸透した町であり、現状を実地調査する。

【3 年目】(2) ナントとレンヌにおけるヴェロニカの信心会の創設と継承に関する研究を重点的に行い、ブルターニュ地方、とくにナントとレンヌを中心に現地調査を行う。

■ナント

1413 年にブルターニュ公ジャン 5 世がナントで設立した「聖ヴェロニカ兄弟会」の実態調査を行う。事前の文献調査をもとに、ナントのブルターニュ大公城博物館と市立図書館で信心会の記録を調査する。ナント近郊のサン・ゲノレ教会には、ヴェロニカの独特な彫刻が存在することが確認できており、ナント市内 5 つの教会で、聖顔の表象の有無と、存在する場合その歴史的経緯を確認する。トゥールのカルメル会修道院は 1994 年に閉鎖されたため、ナントのカルメル会修道院に面談を申し込み、礼拝堂内部や所蔵図書の調査を行う。

■レンヌ

17 世紀、レンヌ出身のドミニコ会修道士アントナン・トマは、ナントの信心会のために『聖ヴェロニカへの信心、あるいは主イエス・キリストの聖顔になされた卑劣な行為と侮辱の償い』(1694)、『罪の償いと冒瀆の根絶のための神とキリストの至聖なる名への信心』(1696) を刊行した。レンヌ市立図書館でこれらのテキストを閲覧し、どのような心性でこの信心会が推進されたか、キリストの「顔」(Face) と「名」(Nom) がどのような論理と文脈で結びつけられているかを考察する。レンヌはトゥールのマリーの故郷であり、17 世紀にカルメル会改革運動の拠点になった土地でもある。その背景も踏まえつつ、市内 9 つの教会で聖顔の調査をし、女子カルメル会で面談、礼拝堂の見学、所蔵文献の閲覧を行う。

各年度末に、研究成果の論文を大学紀要『人文学報』に発表し、機関リポジトリに公開する。

4. 研究成果

【2021 年度】現地調査をせずに実施できる文献収集と文献読解を中心に作業を進めた。具体的には、聖顔の信心の起点となる聖骸布とヴェロニカの聖顔布をめぐって、福音書、聖書外典、受難劇の読解を行った。資料として収集したのは、聖骸布関連書 (英語、仏語、日本語)、聖書外典テキスト (仏語)、受難劇の校訂版各種 (仏語) である。文献の読解分析により、次の点を明確化した。

(1) キリスト埋葬の際、遺骸を包んだ亜麻布、イエスの姿が刻印されたエデッサの肖像、コンスタンティノーブルのマンデュリオン (手拭い)、ローマのヴェロニカ (聖顔布)、フランスのリレからトリノに渡った聖骸布——これらの布をめぐり、福音書と聖書外典の記述、第四回十字軍の歴史、最新の研究書の見解をもとに歴史的経緯と真相を探った。

(2) カトリック教会の信心業「十字架の道行き」第 6 留に現れる、イエスに布を差し出すヴェロニカ像は、福音書の長血の女から、『ニコデモ福音書』等のヴェロニカ伝説を経て、フランス各地で編纂された受難劇、とりわけパリのアルヌール・グレバンの受難劇において具体的イメージを与えられ、今日まで継承されてきた。

(3) 十字架の道行きでヴェロニカが差し出した布と、アリマタヤのヨセフがイエスの遺骸を包んだ亜麻布という 2 種類の布をめぐり、ときに交差、合流しながら、人々の想像世界と

文学テキストの中で長い時間をかけて生まれ、形成されてきた。

以上の内容を論文「トリノの聖骸布とヴェロニカの聖顔布についての覚書——福音書から受難劇まで」にまとめ、東京都立大学『人文学報』に発表、機関リポジトリにて公開した。

【2022年度】15世紀から19世紀までの聖顔の兄弟会／信心会に関する文献調査と、トゥール、リジュー、パリでの現地調査（3月）を行った。ポール・クローデルのテキストを読み進めた。

(1) 1413年にブルターニュ公ジャンによって創設され、18世紀まで存続した、フランス北西部ナントの「聖ヴェロニカ兄弟会」をめぐる、文献読解を行った。ドミニコ会修道士アントナン・トマ『聖ヴェロニカへの信心』（1694年初版）、ジケロ神父「ナントのヴェロニカ兄弟会略史」（1889年）、18世紀の郷土史家ニコラ・トラヴェール『ナント史』3巻本等をもとに、ナントの兄弟会の歴史、受難のキリストの顔を見つめる霊性、信心の実践法の概要をまとめた。

(2) 19世紀にロワール地方のトゥールで設立された聖顔の信心会、大信心会について、歴史と信心の内容を、ピエール・ジャンヴィエ神父『聖顔の大信心会の手引き』、『トゥールのマリー伝』等の文献をもとに調査した。2023年3月にトゥールの「聖顔の礼拝堂」、トゥール大司教区図書館（旧女子カルメル会修道院）等で現地調査を実施した。

(3) 2023年3月にリジューのカルメル会修道院礼拝堂、聖テレーズ資料館、聖テレーズ・バジリカ大聖堂、サン・ピエール大聖堂等で現地調査を行い、リジューにおける聖顔の信心の歴史と現状を確認した。

(4) ポール・クローデルの宗教詩「十字架の道行き」と、トリノの聖骸布をめぐるエッセー「主よ、あなたの顔は」、「キリストの顔」等のテキスト収集と読解を行い、次年度の準備を進めた。

(1)、(2)の研究内容を、論文「ナントの聖ヴェロニカ兄弟会とトゥールの聖顔の大信心会——受難のキリストを見つめる霊性の地域的展開」（東京都立大学『人文学報』第519号、2023年3月、p.19-53）にまとめ、機関リポジトリにて公開した。

【2023年度】(1) 聖顔の信心をめぐるナント、レンヌ、パリでの現地調査（9月）と、(2) ジョルジュ・ルオーの《聖顔》をめぐる調査分析を中心に行った。

(1) ナント、レンヌ、パリでの現地調査

■ナント

ナントは、15世紀にブルターニュ公ジャン5世によって「聖ヴェロニカ兄弟会」が設立された土地であり、兄弟会と信心の痕跡を求め、聖十字架教会、聖ニコラ教会、聖クレマン教会、無原罪の御宿りの聖母教会、ナント近郊のサン・ゲノレ教会、女子カルメル会修道院、ナント歴史博物館、司教区神学校図書館で調査を行った。聖十字架教会では、片隅に聖顔の版画が飾られていたが、19世紀以後のトゥールの聖顔の複製で、ジャン5世の時代のヴェロニカ像の痕跡はどこにも見られなかった。聖ゲノレ教会の天井の要石に刻まれた聖顔には、15世紀の聖顔の面影が反映されているのかもしれない。無原罪の御宿りの聖母教会では、案内係の信徒の方からナント訪問の目的について聞かれ、そこにいた郷土史家の方とお話する機会があった。ブルターニュ公ジャン5世にはじまる兄弟会の歴史については、地元の人でも郷土史家の方も詳しくは知らず、兄弟会の記憶と痕跡はナントではほとんど失われていることがわかった。しかし、本研究について説明する中で、ナント史における聖顔の信心の重要性を認識していただき、今後もしかしたら、眠っていた史料を掘り起こしてくださるかもしれない。ナントの女子カルメル会修道院では、修道女の方、信徒の方と聖顔の信心についてお話しし、トゥールの聖ピエールのマリーとリジューのテレーズの貴重な資料をお分けいただいた。

■レンヌ

レンヌは17世紀に『聖ヴェロニカの信心』を著したドミニコ会修道士アントナン・トマと、19世紀に聖顔の啓示を受けたカルメル会修道女聖ピエールのマリーの出身地であり、サン・ピエール大聖堂、救世主大聖堂、サン・ジェルマン教会、サン・テティエンヌ教会、サン・メラニー教会、サン・トールバン教会、レンヌ市立図書館、カルメル会修道女マリーの生家跡で調査を行った。サン・ジェルマン教会の祭壇脇の礼拝堂には、ひっそり目立たぬ聖顔の絵画がひとつあり、その上には壊れかけた浮彫彫刻の聖顔が確認できた。レンヌ市立図書館では、この図書館にしか所蔵されておらず、確認できないままだったアントナン・トマの『聖ヴェロニカの信心、あるいはわれらの主イエス・キリストの聖顔になされた卑劣な行為と侮辱の償い』（1694）を手にとることができた。聖顔の版画も含まれていたが、これがナントで崇敬されていた聖顔を反映したものかどうかは確認できていない。

■パリ

パリでは、リジューのテレーズ（修道名「幼子イエスと聖顔のテレーズ」）とジョルジュ・ルオーの《聖顔》をめぐる、勝利の聖母教会、サン・シュルピス教会、サン・ニコラ教会、国立近代美術館、キリスト教専門書店で調査と資料収集を行った。サン・シュルピス教会では、一礼拝堂でトリノの聖骸布の複製が展示されていた。サン・ニコラ教会ではリジューのテレーズの彫像の背景にヴェロニカの布の聖顔が刻まれていた。国立近代図書館では、ルオーの《聖顔》は展示されていなかったが、ルオーの自画像と、キリスト像を含む一作品を見ることができた。キリスト教専門書店では、聖顔の信心のノヴェナ（9日間の祈り）の冊子数種や、聖顔のメダルを収集し、数多く存在するさまざまな形態の信心の一つとして現在も続いていることが確認できた。

(2) ジョルジュ・ルオーの《聖顔》をめぐり、『ルオー全絵画』と『ルオー全版画』（岩波書店）を中心に作品の分析と文献読解を行った。清春芸術村（山梨県）のルオー礼拝堂と白樺美術館、パナソニック汐留美術館、出光美術館の展示作品とカタログをもとに、聖顔と受難をめぐる作品の考察を進めた。ルオーに影響を与えた文学者ジョリス＝カルル・ユイスマンス、レオン・ブロワ、アンドレ・シュアレス、ルオーの最初の理解者となった哲学者ジャック・マリタンとライサ・マリタンらのテキストを分析した。また、ルオーらの着想源となったドイツのアウグスティヌス会修道女アンナ＝カタリナ・エムリックの『われらの主イエス・キリストの痛ましきご受難』の読解を進め、作品への反映を考察した。

論文「ジョルジュ・ルオーにおける聖顔とヴェロニカ覚書—信仰と文学をめぐって」にまとめ、機関リポジトリにて公開した。

今後の展望

機関リポジトリのダウンロード状況を見ると、アメリカからのダウンロードが半数を占め、聖顔への関心はアメリカで高い印象を受けている。1976年にカナダのモントリオールで「聖顔協会」(Holy Face Association)が設立され、ニューヨークにも支部が置かれており、聖顔の信心の北米への波及と現状を把握する必要があると感じている。現地調査したトゥールトリジュールにおける聖顔の信心の現在、ポール・クローデルの『十字架の道行き』読解分析、ジョルジュ・ルオーの聖顔／ヴェロニカ作品全体の分析、アンナ＝カタリナ・エムリック『われらの主イエス・キリストの痛ましきご受難』のクローデル、ルオーへの影響の考察など、各年度の研究論文に取りこめなかったテーマがあり、今後、フランスにおける聖顔の信心とその波及の様相を概観できるかたちにまとめていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大須賀沙織	4. 巻 520
2. 論文標題 ジョルジュ・ルオーにおける聖顔とヴェロニカ覚書 信仰と文学をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京都立大学人文科学研究科『人文学報』	6. 最初と最後の頁 21-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大須賀沙織	4. 巻 519
2. 論文標題 ナントの聖ヴェロニカ兄弟会とトゥールの聖顔の大信心会 受難のキリストを見つめる霊性の地域的展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京都立大学人文科学研究科『人文学報』	6. 最初と最後の頁 19-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大須賀沙織	4. 巻 518
2. 論文標題 トリノの聖骸布とヴェロニカの聖顔布についての覚書 福音書から受難劇まで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京都立大学人文科学研究科『人文学報』	6. 最初と最後の頁 27-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------